

## マプーチェのマップとは何だったのか？

工藤由美 (国立民族学博物館)

キー・ワード： マプーチェ、環境、マップ、生、互酬性

### What was Mapuche's Mapu ?

YUMI KUDO (National Museum of Ethnology)

Keywords: Mapuche, environment, Mapu, life, reciprocity

2021年11月3日、英国グラスゴーで開催された国連気候変動枠組み条約第26回締約国会議(COP26)会場で、地球温暖化対策の国際交渉に先住民との対話の場を設けるよう要請する「ミンガ(集会)」が行われ、先住民側は、世界の多様な生物の70%が先住民の住む地域に集中しており、「先住民が置かれた状況や提案を含めずに、気候変動の解決策を語ることはできない」と主張した。同集会にはチリの先住民であるマプーチェも出席していた。

本報告の目的は、上述のような世界規模で認識されている「環境」に対し、マプーチェが環境、とりわけ「マップ(*mapu*: 土地)」についてどのように認識し、どういった実践を積み重ねているかの検討を通して、マプーチェの環境の見方と他の見方との異同を比較した。

地球環境問題において従来、先住民は進歩的な環境開発に対する抵抗ないし主要な障害とみなされてきたが、今では、先住民文化はグローバル化の進展なかで次第に、環境破壊がもたらす問題に対する革新的な応答とみなされるようになってきている[シモン他 2019:141]。先住民にとって土地や自然がその社会と文化統合の重要な基礎であるということの意味を、マプーチェのマップから検討する。

土地が「先住民の文化統合の基礎」[シモン他 2019:147]。となっているとはどういうことか。ここではマプーチェ語の2つの表現から考察した。第1は、日々繰り返し交わされる挨拶である。人と会った際に「あなたは元気ですか」「はい、私は元気です」といった意味の表現がマプーチェ語でも交わされるが、重要なのはこの挨拶表現の中に現れる「あなた」と「私」とはどのよ

うな存在かということである。マプーチェ語の「私は元気である」という表現における「私」は単なる「個」人ではない。もちろんこの「私」には自分が心身ともによい状態であることが含まれるが、他に、私の家族(親族)も健康で、家族内に諍いがなく、また家畜の状態に問題がなく、畑の作物も順調に育っていることなども意味し、さらには、自分たちの共同体内に大きな問題がなく、自分たちの住むマップが総じて落ち着いているということまでも含み込んでいる。それは、常日頃から上記のことに気を配り、何らかの問題があれば、すぐに対処できるような心構えと準備をしておくという、彼ら自身の生き方の一つの現れである。それは、「マップの中に生きているすべての存在=自分の周りに広がる世界」の中に自分を常に位置づけ、その全体を日々評価しながら生きるということなのである。

第2は、マプーチェ語の「モゲン(*moguen*: 生、生命)」という言葉である。彼らは人間、動植物、川、山、家屋など自然界の全てにモゲンがあると捉えている。そして、その生あるものたちには、それぞれ所有者「ゲン(*guen*)」が居り、ゲンの状態もまた、それぞれのモゲンに影響を与える[Citarella 1995:54]。手入れをされないまま廃墟と化したマプーチェの伝統的な家屋ルカ(*ruka*)の事例はその一例である(図1)。翻って、さまざまな生あるものたちを内に抱えるマップのモゲンは、上記個々のモゲンたちが織りなす集合的な出来事として解釈できる。なぜなら、マプーチェの先祖たちが代々語り継いできたマップの歴史とは、マップの記憶であり、同時に彼らマプーチェの直接の「知識(キムン:*kimn*)」でもあるが、それはすべてのゲンとモゲンから成り

立っている [工藤 2013:167] からである。

そうしたマプに対する人々の実践を、ここではマプーチェが自己とマプとの関係を再確認する儀礼でもある「ギジャトゥン (*guillatun*)」を例に検討した。ギジャトゥンは天候や収穫など共同体全体の安寧に関わる集合的祈願儀礼である。儀礼では、共同体の人びとがマプに豊穡や安寧を祈願する一方、マプに対しては収穫物を供え、家畜を供養することで共同体とマプの間の互酬関係の存在・継続を確認することになる。人々の祈願と供養の間には均衡が保たれることが重要であるが、それは、マプ自体をよい均衡状態に保つことにもつながるからである。ギジャトゥンでは共同体成員同士の相互贈答を通じて彼らの間の互酬関係も再確認されるが、そこでも贈答の質的量的均衡が重要と認識されている。

マプーチェにとってマプとは何なのか、また、マプとのかかわり方はどうあるべきと考えられ、実践されているのかを整理しておく。

マプーチェにとって、マプ (土地) とは自分たちに先んじて存在し、自分たちの存在の前提となるものである。すべての生はマプに生まれ、マプや他の生たちとの関係の中で成長し、次世代へ生をつなげていく。そして、マプとのかかわり、またマプの中のさまざまな生たちとのかかわりの中で何より重要なのが、互酬関係における均衡である。それぞれの関係における均衡が、その全体としてのマプの良い均衡状態に連動するからである。この均衡への指向を支えているのは、マプとマプに存在するさまざまな他の生 (モゲン) へのリスペクトであるが、それは、マプーチェの日常がこれらを意識した実践で形作られることで、日々更新されていく。マプーチェにとって、そもそもの日常が環境と共生し、折り合う実践だったのである。長らく不在にしていたマプ = 首都圏への移住 = 帰還で問題となるのは、マプとの新しい関係の確立を支えてくれる新しい均衡を見出すことだといえよう。

最後に、人間以外の種にかかわる環境実践について簡単に考察する。

環境についての近年の議論の中には、植物の感覚系を理解しようとする試みや、動物の心へ

の感受性を養うというような主張が出現しているが、いずれも非日常を日常に取り込むべきだという主張に見える。しかし、マプーチェの環境実践は彼らの日常そのものであるに過ぎない。日常に非日常を外挿しようとする試みや主張にどれほどの可能性があるのか報告者には疑問が残る。



図1 首都で先住民組織が活動する家屋「ルカ」

#### 【主要参考文献】

工藤由美、2013、『先住民組織からケアを描く：チリの首都におけるマプーチェ組織活動の民族誌』、千葉大学大学院人文社会科学研究所提出博士論文、pp.1-318。

シモン・ジャンヌ・W、ゴンサレス・パラ・クラウディオ、2019、「国家の開発促進と先住民の権利：マプーチェの自決権要求とチリ政府の緊張関係」、『グローバル化する<正義>の人類学：国際社会における法形成とローカリティ』、細谷広美・佐藤義明編、pp.139-166、昭和堂。

Citarella, Luca et al., 1995, *Medicinas y culturas en La Araucania*. Editorial Sudamericana.